

天文教育フォーラム

「新世紀のプラネタリウム利用を提案しよう」報告

縣秀彦（国立天文台）

2000年10月5日に日本天文学会秋季年會が群馬県伊勢崎市で開催されました。天文教育普及研究会は学会との共催でフォーラム「新世紀のプラネタリウム利用を提案しよう」を行いましたので報告します。

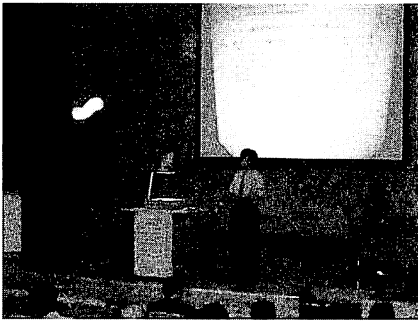


図1. フォーラムの様子

1. 「天文普及活動としての五島プラネタリウムの役割」 木村かおる（五島プラネタリウム学芸員）

五島プラネタリウムは、社会教育や学校教育としての天文知識の普及につとめるだけでなく、各地のプラネタリウム館開館の援助や学芸員資格のための実習を引き受けたりしてきた。他館との競合、娯楽の多様化、子どもの減少など複合的な原因で入場者数が減少し閉館をむかえることになった。反省点としては、設立時に基本財源を持たなかったこと、財団法人としての自覚が足りなかったこと、入館者減に対して有効な対策を考えなかったこと、解説員の引きこもりなどがあげられる。

2. 「プラネタリウムは今」 渡部義弥（大阪市立科学館学芸員）

今回の発表のために、全国のプラネタリウ

ム全館340館にアンケート調査を実施。その結果によると、国内での年間プラネタリウム利用者数は推定で500万人。サッカー（J1+J2）が300万人、野球のジャイアンツ戦が300万人、公開天文台が60~70万人であることを考えると、プラネタリウムは国民の文化・教養の共有に多大な影響を与えていると言えそうだ（調査の詳細は、木村かおる、天文教育2001年1月号、p22-27参照のこと）。

3. 「どこへ行こうかプラネタリウム」 山田卓（四日市市立博物館顧問）

各館の席の埋まり具合は、平均で2~3割程度。この空席を埋める工夫を考えてみたい。しかし、館ごとに運営に特色がある。名古屋市科学館での実践から可能性を提案すると、名古屋大学と共同で開催している「天文学の最前線」レクチャーや、CGの制作、作曲家など異分野間のコラボレーション、天文指導者の募集などが対策として考えられる。また、天文学会からプラネタリウムに天文講演の出前をしたらどうか。

4. 「ユニバースとプラネタリウムの将来」

戎崎俊一（理化学研究所情報基盤研究部長）

20世紀のプラネタリウムは地上から見た星空を再現する道具だったが、21世紀は、宇宙のどこへでも移動し、ミクロの世界、生命の世界から宇宙全体までをシームレスに見せる道具に進化するであろう。星空だけの時代は終わった。最新の科学データを使い、学者やメーカーと共同で新しいコンテンツを開発すべし。「お客に何を見せたいのか？」が大事なのに、大方のプラネタリウムは十分努力しているとは言えない。

フォーラム参加者は約140名で、五島プラネタリウムをはじめ相次ぐプラネタリウム館の閉館を心配する人が多いことがうかがえました。また、プラネタリウム館をはじめとする社会教育施設への支援を申し出る研究者からの発言が相次ぎ、その後日本天文学会教育委員の働きにより、研究者の出前システムが学会で作られることになりました（詳しくは「天文月報」2001年3月号参照）。

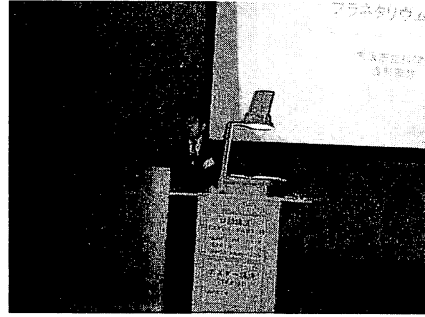


図2. フォーラムで発表する渡部氏

1月号の編集ミスとお詫び

1月号で以下に示す誤りがありました。ここに訂正をし、著者、関係者および読者の皆様にお詫び申し上げます。

『「プラネタリウムの国勢調査」結果報告』

25ページ 左表12

(誤)

学習投影の番組制作	館数	構成比
すべて自作	118	50.4%
シナリオは自前、製作は外注	15	6.4%
企画は自前、製作は外注	27	11.5%
業者の番組から選択	32	13.7%
場合により異なる	14	6.0%
その他	7	3.0%
複数回答	2	0.9%
回答なし	19	8.1%
合計	234	100.0%

(正)

一般向け番組の制作	館数	構成比
すべて自作	81	34.6%
シナリオは自前、製作は外注	15	6.4%
企画は自前、製作は外注	36	15.4%
業者の番組から選択	56	23.9%
場合により異なる	27	11.5%
その他	9	3.9%
複数回答	7	3.0%
回答なし	3	1.3%
合計	234	100.0%